

肋膜炎経過中ニ於ケル赤血球沈降速度ノ變化

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/31033

肋膜炎經過中ニ於ケル赤血球沈降速度ノ變化

金澤醫科大學山田内科教室(主任山田教授)

吉 本 勝

目 次

緒 論	
第一章 實驗方法	
第二章 實驗成績	
第一項 健康成人ノ赤血球沈降速度	
第二項 肋膜炎ノ經過中ニ於ケル赤血球沈降速度	
第一、臨床上全ク合併症ヲ有セザルモノ。	
甲、滲出液ガ一回ノ穿刺後再ヒ滯溜セズ全ク吸收 サレ治癒セルモノ。	
乙、一回穿刺後再三滯溜セルモ次第二輕快シ治癒	
第二、臨床上合併症ヲ有スルモノ。	
甲、結核性腹膜炎ニ肋膜炎ヲ併發セルモノ。	
乙、潜伏性微毒患者ノ滲出性肋膜炎ニ罹リシモノ。	
第三章 實驗成績總括	
文 獻	

緒 論

結核性患者ノ赤血球沈降速度ニ就テハ既ニ A. Erisch und W. Starlinger, Fahrrens, Westergren, Dellaye, Schüner und Eimer, Weicksel, Mathe, Karl, Verdia, Dreyfuss und Hecht, Levinson, 村上、長島等ノ研究成績アリ、今之等ヲ通覽スルニ一般ニ赤血球沈降速度ハ促進シ殊ニ肺結核ニハ著明ニシテ疾病ノ進行程度殊ニ非活動性ノモノハ遅ク活動性ノモノハ速ニシテ更ニ結核性疾患ノ經過ヲ逐ヒ測定スルニ兩者ニ略々平行關係アリ即チ急性ニ經過スルトキハ急速ニ

促進シ、慢性ノモノハ緩慢ニシテ進行停止シ治癒ニ向フトキハ遲延シ、潜伏性ナルトキハ體温、其他他覺的ニ症狀ナクモ速度速ニシテ本疾患ノ診斷並ニ豫後ニ關シ重要ナル意義ヲ有スルモノナリト云フ、而シテ之ト密接ノ關係アル肋膜炎患者ノ沈降速度ニ就テ⁽¹⁾ Neegaard ハ滲出性肋膜炎ニハ速度速ニシテ滲出液ノ吸收サル、ト共ニ速ニ尋常ニ復スト述ベタリ、⁽²⁾ Windrich und Garmatz ハ肋膜炎ノ沈降速度ハ餘リ一定セザルモ一般ニ滲出性肋膜炎ニ於テハ沈降速度低ク限局性ノ乾性肋膜炎ニ屢々高度ナルコトアリト云ヘリ、更ニ⁽³⁾ Weickel ハ肺結核ノ人工氣胸療法ノ經過中肋膜炎ノ滲出液ノ瀦溜スル際沈降速度甚ダ促進スルヲ認メタリ、我國ニ於テモ⁽⁴⁾ 長島氏ハ肋膜炎患者ニ在リテ滲出性ノモノハ然ラザルモノヨリ沈降速度大ナリト云フ、⁽⁵⁾ 大谷氏ハ種々ナル肋膜炎患者ニ就テ單ニ肥厚ノミヲ有スル陳舊性肋膜炎又ハ炎症々狀ノ去レルモノ、速度ハ通常ナルカ或ハ多少促進セルノミナルモ目下炎症々狀著明ナルモノハ速ニシテ本反應ハ肋膜炎症ノ有無ヲ略々鑑別シ得ト述ベタリ、⁽⁶⁾ 出井氏ハ特發性胸膜炎患者二十二名、軍隊胸膜炎患者十二名、輕症型胸膜炎患者三名ニ就キ赤血球沈降速度ヲ測定セルニ本病患者ハ病日ノ長短、滲出液量ノ多寡、體温ノ高低如何ニ關セズ胸腔内ニ滲出液ヲ藏スル限リ速度ハ促進セラレ滲出液ハ既ニ全ク吸收セラレ體温ノ尋常ニ復シ自覺症無キニ至リテモ尙暫ク相當ノ促進ヲ示シ、二ヶ月ノ恢復期ヲ經過シテ初メテ正常値ニ復スルモノ、赤血球沈降速度ハ必ズシモ胸部理學の所見ニ平行セズ炎症最モ盛ニシテ一般症狀並ニ胸部所見最モ著明ナルベキ發病日新ナルベキ時期ニ必ズシモ高度ノ赤血球沈降速度ナシト云フ、今之等ヲ綜合スルニ滲出性肋膜炎ニ於テハ一般ニ赤血球沈降速度ハ促進シ滲出液吸收サレ治癒セルモノハ遂ニ正常値ニ復スルガ如シ、然ルニ滲出性肋膜炎患者ニ就キ永ク其ノ經過ヲ追ヒ赤血球沈降速度ヲ觀察シ臨床上ノ所見ト比較セル文獻ハ余ノ寡聞未ダ之ニ遭遇セズ。

第一章 實驗方法

測定法トシテハ Westergren 氏法ヲ用ヒ桐櫛酸曹達水溶液三・五五%ノ等張液ヲ滅菌シ可及的新鮮ノモノヲ用ヒタリ、温度ノ高低ニヨリ赤血球沈降速度ニ變化アルコトハ既ニ Ley, Öttingen, Westergren, 村上、竹林等ノ認ムル所ニシテ余モ亦温度ニ注意シ常ニ攝氏二十度ニ於テ測定セリ、沈降速度觀察ハ一

時間及び二時間又ハ三時間毎ニ檢セリ。

Westergren ニヨルバ一時間、二時間及ビ二十四時間後ノ觀察ニテ沈降速度ノ全經過ヲ完全ニ知り得ルモノナリト云フ、余モ二十四時間後ニモ測定セルモ一時間及ビ二時間ノ測定ニテ足レルヲ以テ省略セリ、採血ハ早朝空腹時ニ少クモ一時間安靜ヲ保タシメタル後正中靜脈ヨリ壓迫ヲ加ヘズ行ヒタリ。

第二章 實驗成績

第一項 健康成人ノ赤血球沈降速度

健康成人中女性ガ男性ヨリ赤血球沈降速度速カナルコトハ既ニ Plant, Runge, Büscher, Schönfeld, Löhr, Bennighof, Faltraeus, Schubert, Westergren, Linzenmeier, Katz, Krimphoff, Haselhorst, Kovács, Frisch-Starlinger 等ノ研究アリ、我國ニ於テモ泉山、清水、古市、渡邊、大谷諸氏ノ認ムル處ニシテ既ニ周知ノ事實タリ、而シテ Faltraeus ニヨレバ健康成長男子ノ赤血球沈降速度ハ一時間後三三耗ニシテ妊娠セザル婦人ハ七四耗ナルモ男子九耗以上、女子(妊娠セザル)十二耗以上ヲ病的ト見做セリ、⁽⁸⁾ Westergren ハ男子三耗、女子七耗ニシテ男子八耗、女子十二耗以上ヲ病的トセリ、其他⁽⁹⁾ Linzenmeier⁽¹⁰⁾ Katz, ⁽¹¹⁾ Krimphoff, ⁽¹²⁾ Haselhorst, ⁽¹³⁾ Kovács ⁽¹⁴⁾ Frisch-Starlinger⁽¹⁵⁾ 古市、⁽¹⁶⁾ 大谷等ノ實驗成績ヲ一括スルニ男子二―五、女子三―一五ナリ、而シテ小兒ノ赤血球沈降速度ニ就テハ⁽¹⁷⁾ Bardach ハ一歳ヨリ十五歳マデノ男女健康小兒ニ就テ測定セルモノニヨレバ成人ニ比シニ乃至三倍速ニシテ兩性間ノ差異及ビ個人的ノ變化モ少ク年齢ニ於テモ一定ノ關係ヲ認メズト云フ(但シ一歳以下ヲ例外トス)、補乳兒ノ沈降速度ニ就テ⁽¹⁸⁾ Gryosy ハ約十二耗ナリト云ヒ⁽¹⁹⁾ Asai-Falkenheim ニヨレバ一歳半ヨリ十歳迄ハ六乃至十四耗ニシテ十歳乃至十四歳ハ三―六耗ナリト云フ、更ニ⁽²⁰⁾ Dehoff ニヨレバ一歳半ヨリ四歳マデ六―七耗、三歳ヨリ六歳マデ五―六耗、七歳ヨリ八歳マデ三―四耗、九歳ヨリ十四歳マデ二―三耗ナリト云フ、之ヲ要スルニ小兒殊ニ十五歳頃迄ハ男女共赤血球沈降速度速ニシテ成人ニ於テハ女性ハ男性ヨリ遙ニ沈降速度速ナリ。

余ガ吾ガ教室員及ビ雇人、看護婦ニシテ何レモ十五歳以上ノ自、他覺的ニ健全ナルト共ニ殊ニ男子ハ皆微毒ヲ否定シ

得ルモノニシテ（ワッセルマン）反應陰性ナルモノ、其他既往及ビ現症ヨリ否定シ得ルモノ）女子ハ月經時ノ者ヲ除キ沈降速度ヲ測定セルモノ男子八名、女子十名ニシテ沈降速度ハ一時間男子平均五八耗、女子ハ十六耗ニシテ之ヲ先人ノ實驗成績ト比較スルニ稍々高キモ Kovacs ノ成績ニ略々一致ス、而シテ余ノ成績ヨリスレバ女子ノ沈降速度ハ男子ノ約三倍ナリ、尙女子ハ月經時ニ際シテ沈降速度促進スルコトハ既ニ⁽²⁾ Linzenmeier ノ認メシ所ニシテ⁽²³⁾ Rumpf ハ月經ノ第一日乃至第二日ニ特ニ促進スト云ヒ、其他⁽²⁴⁾ Haselhorst, ⁽²⁵⁾ Poindecker-Sless, ⁽²⁶⁾ W. Löhr ⁽²⁷⁾ Runge 等モ月經時ノ促進ヲ認メタリ。故ニ以上ノ健康女子ニハ勿論之ヲ考慮セリ。

第二項 肋膜炎ノ經過中ニ於ケル赤血球沈降速度

大正十五年ヨリ約三ケ年ニ亘リ吾ガ内科ニ長時日入院セル滲出性肋膜炎患者約二十數名ニ就キ其ノ經過中赤血球沈降速度ヲ測定セルモノヨリ比較の永ク其ノ經過ヲ觀察シ得タルモノ十九名ヲ選ビ之等ヲ先ヅ全ク合併症ヲ有セザル者ト合併症ヲ有スルモノトニ大別シ、更ニ最初ヨリ全ク合併症ヲ有セザルモノニ就キ一回穿刺後再ビ滲出液ノ滯溜セザリシモノト、再三滯溜セルモ遂ニ滯溜セザルニ至レルモノ及ビ經過中肺臟ニ結核性徵候ノ現レタルモノ又ハ肋膜ノ著キ肥厚、癒着ヲ胎セルモノニ分チ、他方結核性腹膜炎又ハ潜伏性微毒ヲ合併セルモノニ就キ赤血球沈降速度ヲ測定シ滲出性肋膜炎ノ經過ト比較觀察セルニ興味アル成績ヲ獲タルヲ以テ以下項ヲ逐ヒ記載セントス。

第一、臨床上全ク合併症ヲ有セザルモノ。

甲、滲出液ガ一回ノ穿刺後再ビ滯溜セズ全ク吸收サレ治癒セルモノ。

滲出液ノ穿刺ハ常ニ試験的穿刺以外ハ一回ニ一〇〇乃至一五〇〇耗以下ニシテ尙之レ以上滲出液滯溜シ更ニ穿刺シ得ルモノ之ニテ中止シ、此ノ量以下ナル時ハ常ニ穿刺シ得ル限リ全部穿刺セリ。

第一表 高〇某 看護婦生徒 生來全ク健康ナリシガ十七歳ノ一月二十二

日ノ朝起床ノ際右側胸部ニ刺痛アリ、更ニ壓迫感加ハリ、レントゲン透

視ヲ行フモ滲出液ノ所見無ク勿論摩擦音、濁音等無シ、同月二十四日僅

ニ滲出液ヲ認メタリ。

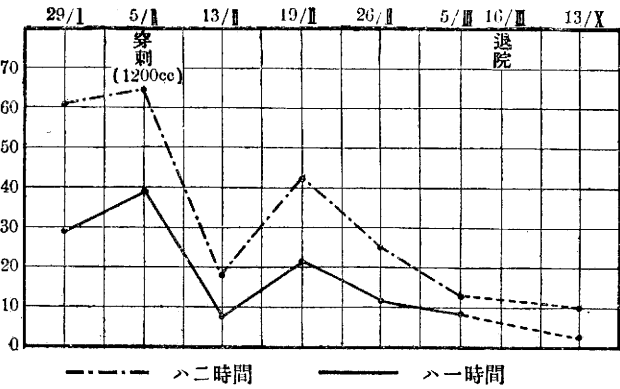
第一表 高〇某 年十七歳 右側滲出性肋膜炎

月 日	發病ヨリノ経過日數	赤血球沈降速度			體 溫	穿刺回数	滲出液量 (cc)	痛 要
		一時間	二時間	三時間				
29/I	7	29	61	73	36.4			右側胸部第三肋骨以下滲出液アリ。
5/II	14	39	64.5	73	36.1	1	1200	穿刺前ハ前回ト同様ナルモ穿刺後レントゲン透視上第五肋骨以下ニ滲出液アリ、胸部右側下部ニ僅ニ摩擦音アリ。
13/II	22	7	17.5	23.5	36.0			胸部右側ハ打聽診上殆ド變化無ク(摩擦音無シ)レントゲン透視上第五肋骨以下ニ僅ニ薄キ陰影アリ。深呼吸ノ際ニモ横膈膜ノ運動全クナシ。
19/II	28	21	42.5	53.5	36.2		同上	同上
26/II	35	12	24.5	35.5	36.3			自覺的ニ何等症狀無ク、食慾可良體重一尭増加ス。
5/III	42	8	13	17	36.0			右側ハ横膈膜ノ嚙着アリレントゲン透視上深呼吸ノ際ニモ運動ナシ。
16/II	退院 53				36.4			退院後自宅ニテ静養シ約二ヶ月後ヨリ勤務ニ従事ス。
13/X	約八ヶ月	3	10		36.3			營養性タテ可成トナリ、打聽診上及レントゲン透視上何等所見無ク、横膈膜ノ嚙着ナシ、勤務ニ従事スルモ何等ノ自覺症無ク、體溫全ク平温

(附言) 表中ノ體溫ハ採血時ノ體溫ニシテ早朝空腹時ナリ、體溫上昇時ニ赤血球沈降速度促進スルコト(27) Pribram und Otto 等ノ認メシ所ニ

シテ(28) Schäfer und Eimer 等ヨリ急性肋膜炎性熱性病ニ促進スルヲ認メシルヲ以テ特ニ沈降速度ト併テ記載ス。

第一表 附圖



(註) 右表中 Ordinate ハ血球沈降速度ヲ示シ Abscisse ハ經過日數ヲ示ス、以下凡テ之ニ做フ。

第二表 今〇某、看護婦生徒

四月二日朝左側胸部ノ下部ニ呼吸ノ際疼痛アリ、發熱三十七度六分ヨリ三十八度ニ上昇シ六日胸部ノ疼痛ハ輕快セルモ時々咳嗽アリ、八日左側第三肋間以下ニ濁音アリ、レントゲン透視上濁音部ニ一様ニ濃キ滲出液ノ陰影アリ。

第二表 左側滲出液肋膜炎

今〇某 十七歳 女

月 日	發病ヨリ經過日數	赤血球沈降速度		體 溫	穿 刺 回 數	滲 出 液 量 (cc)	摘 要
		一時間	二時間				
12/IV	10	28	48	37.6			左側胸部ハレントゲン透視上第三肋間以下ヨリ滲出液アリ。
16/V	14	12	25	37.5			同 上
19/V	17	16	33.5	36.7	1	300	穿刺後レントゲン透視上滲出液ノ陰影ナシ 横膈膜ト肋膜ハ癒着ス
26/V	24	15	42	36.3			患者ハ打聽上變化無ク、レントゲン透視上滲出液ノ陰影ナシ、タゞ左側横膈膜ト肋膜ハ癒着シ深呼吸時モ横膈膜ノ運動稍々不良ナリ。
3/VI	30	9	22	36.5			
4/V	退院 31						退院後自宅ニテ静養シ約二ヶ月後ヨリ本院ニ於テ勤務ス
13/X	193 (六月半)	6	18	36.3			營養可良、打聽診並ニレントゲン透視上何等變化無ク横膈膜ノ運動モ甚ダ可良ナリ、勤務ニ從事スルモ自覺的ニ何等症狀ナシ。

以上第一、第二表ニ例示セル如ク何レモ一回ノ穿刺後滲出液ハ瀦溜セズ治癒セルモノニシテ而モ殆ド後胎症ヲ胎サズ一ケ年以上ヲ經過セル今日モ益々健康ニシテ自、他覺的ニ何等症狀無ク勤務ニ従事セルモノナルガ、穿刺後次第ニ沈降速度ハ遲延シ尋常トナリ、滲出性肋膜炎ノ治癒ト一定ノ平行的關係ヲ觀ル。

第三表 右側滲出性肋膜炎
水○某 早十六歲

月 日	發病ヨリノ經過日數	赤血球沈降速度		體 溫	穿刺回数	滲出液量 (cc)	摘 要
		一時間	二時間				
8/XI	一ヶ月	81	115	36.5			體格可良、榮養中等度右側第五肋骨以下ニ滲出液アリ右側肺尖ハ打診上短、呼吸音粗ナリ、副雜音無シ。
15/XI	37	59	83	36.5	1	100	滲出液淡黃色、穿刺後肋膜ハ横膈膜ト癒着ス
22/XI	44	41	67	37			同 上
3/XII	55	32	58	36.7			同 上
10/XII	二ヶ月	30	52	36.6			肋膜ノ肥厚癒着ヲ胎ス

第四表 右側滲出性肋膜炎
加○某 早二十五歲

月 日	發病ヨリノ經過日數	赤血球沈降速度		體 溫	穿刺回数	滲出液量 (cc)	摘 要
		一時間	二時間				
31/V	10	35	70	37.2			右側胸部第四肋骨以下ニ滲出液瀦溜シ、該部ハ打診上短、呼吸音減弱シ僅ニ摩擦音アリ。
4/VI	二週	59	82	36.4	1	400	滲出液ハ淡黃色、比重千二十四、蛋白含量六%穿刺後摩擦音著明ニ現ル。
9/VI	19	40	70	35.9			試験的穿刺ヲ行フモ滲出液出ズ。
18/VI	28	31	61	36.5			摩擦音アリ、右側横膈膜ト肋膜ハ癒着ス
25/VI	35	33	63	36.2			摩擦音殆ド無キモ右側肋膜ハ癒着ス。

以上第三、第四表ノ症例ニ於テモ一回ノ穿刺後再ビ滯溜セズ治癒セルモ前二者ニ比シ稍々著キ肋膜ノ肥厚癒着ヲ胎セルモノニシテ沈降速度ハ肋膜炎ノ輕快ト共ニ次第ニ遲延セルモ前二者ノ如ク三乃至四週ノ短時日ニ於テハ尋常値ニ復歸セズ。

乙、一回穿刺後再三滯溜セルモ次第ニ輕快シ治癒セルモノ。

第五表 右側滲出性肋膜炎 川○某 廿九歲

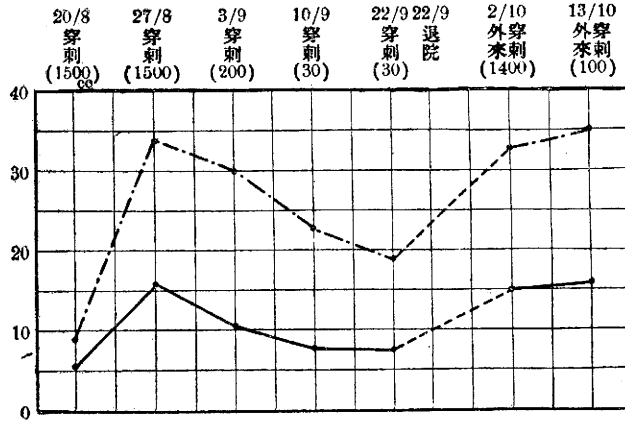
月 日	發病ヨリノ經過日數	赤血球沈降速度			體溫	穿刺回数	滲出液穿刺量 (cc)	摘 要
		一時間	二時間	三時間				
20/VIII	一ヶ月	5.5	8.5	10	36.3	1	1500	肺部右側ハ殆ド全部濁音ヲ呈シレントゲン透視上滲出液ハ右側ノ殆ド全部ニ滯溜セルモ穿刺後第三肋骨以下ニ滲出液アリ、摩擦音、著明ニ現レ。
27/VIII	37	16	33.5	38	36.4	2	1500	穿刺前ハ前回ノ穿刺後ト略同シ、穿刺後第五肋骨以下ニ滲出液アリ。
3/IX	44	10.5	30	39	36.2	3	200	摩擦音アリ、滲出液ハ更ニ増加セズ
10/IX	51	8	23	32	36.3	4	30	摩擦音アルモ右側乳線ニ於テ加肝境界尋常レントゲン透視上右補充實ニ僅ニ滲出液ノ陰影アリ
22/IX	63	7.5	19	29	36.5	5	30	同 上
22/10	退院							全治セザリシモ都合ニヨリ退院、後屢々外來ニ通院ス。
2/X	73 (外來)	15	33	40	36.8	6	1400	退院後自宅ニアリ、外來ニ來ル自覺的ニ殆ド症状ナキモ右側第三肋骨以下ニ滲出液アリ、直ニ穿刺ス。
13/X	84 (外來)	16	35	43	36.5	7	100	右側第五肋骨以下ニ滲出液アリ、穿刺後殆ド滲出液ノ陰影ナク(レントゲン透視上)僅ニ肋膜ハ癒着ス
16/IV 翌年	約九ヶ月 (外來)							其後轉地(熱海)シ專ラ静養ス、當日外來ニ來ル、打聽診上胸部ニ何等所見ナク、「レントゲン」透視上ニモ所見ナク肋膜ノ癒着無ク、右側肋膜ハ運動可長體重モ三肥増加ス。

第六表 高〇某〇 二十二歳 左側滲出性肋膜炎

月 日	發病ヨリ過日數	赤血球沈降速度		體溫	穿刺回数	滲出液量 (cc)	摘	要
		一時間	二時間					
12/XI	33	13	33	36.7	1 (試驗穿刺)	100		體格營養甚ダ可良、胸部右側ハ打診診上殆ド響ナルモ、左側肋骨上部分ハ打診上短、以下第三肋間ニテ鼓濁音ヲ呈シ、摩擦音アリ、第四肋骨以下ハ響ツク短、呼吸音殆ド消失シ、レントゲン透視上響ツク陰影ヲ呈ス。
15/XI	36	11	23	36.4	2	700		穿刺前ハ殆ド同上ナルモ、穿刺後左側胸部ハレントゲン透視上一様ニ陰影ヲ呈シ、摩擦音アリ。
22/XI	43	4	8	36.4	3	130		僅ニ摩擦音アリ。
29/XI	50	4	13	36.3	4	100		同 上
6/XII	57	1.5	3.5	37.3		50		同 上
13/XII	64	3	7	36.4		25		左側横膈膜ト肋膜ト僅ニ癒着アリ。
20/XII	71	1.5	6	37.0		28		摩擦音殆ド無シ。
27/XII	78	3	6	36.3				

第五、第六表ノ二症例ハ何レモ體格、營養共ニ甚ダ可良ナル者ニシテ第八表ノ症例ハ初メ甚ダ多量ノ滲出液ノ存在セルモ沈降速度ハ殆ド尋常ニシテ次第々々促進シ再ビ滲出液ノ瀦溜減ズルト共ニ次第二遲延シ退院時モ殆ド尋常値ナリシニ退院後再ビ増加シテ多量ノ滲出液瀦溜シ沈降速度モ促進セリ、第九表ニ於テモ滲出液瀦溜ノ減ズルト共ニ沈降速度モ次第二減少シ尙少量ノ滲出液瀦溜セルモ尋常値ニ達セリ。

第五表附圖



第七表 右側滲出性肋膜炎
吉○某 早 四十八歳

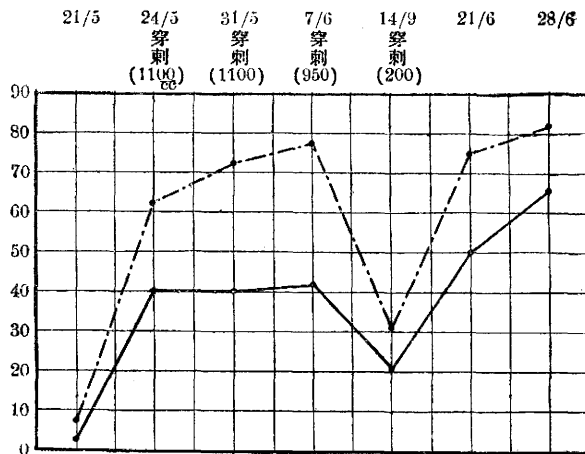
月 日	發病ヨリノ經過日數	赤血球沈降速度		體溫	穿刺回数	滲出液量 (cc)	摘 要
		一時間	二時間				
26/XI	約三月半	76	107	36.3	1	100 試験穿刺	胸部右側ハ上部ヨリ短調ニシテ殊ニ第四肋骨以下ハ著シク下部ニ摩擦音ヲ聽ク、レントゲン透視上、上部ヨリ一様ニ陰影ヲ呈シ下部ニ進ムニ從ヒ濃ク滲出液ノ陰影ノ境界ハ不鮮明ナリ。
3/XII		59	93	36.6	2	300	穿刺後摩擦音著明トナル。
10/ⅴ	約四ヶ月	95	126	36.8	3	300	穿刺後モ下部ニ一様ニ陰影アリ。
17/ⅴ		58	93	36.4			試験的穿刺ヲ行フモ滲出液無ク、レントゲン透視上下部ニ一様ニ陰影アリ、僅ニ摩擦音ヲ聽ク
24/ⅴ		60	88	36.2			打診上右側胸部ハ上部ヨリ短調ニシテ殊ニ下部ニ著シク試験的穿刺ヲ行フモ滲出液無ク、摩擦音モ無キモレントゲン透視上、下部ニ一様ニ陰影アリ。

第七表ノ症例ニ於テ
モ再三瀝溜セルモ遂ニ
瀝溜セズ次第ニ輕快シ
沈降速度モ次第ニ遲延
セルモ最後ノ穿刺後短
時日ニ於テハ尙尋常値
ニ復歸セズ。

丙、再三瀝溜セル
モ遂ニ滲出液ハ瀝溜
セザルニ至リタリト
雖モ肋膜ノ著キ肥厚
癒着ヲ胎シ、肺臟ニ
結核性ノ徵候現レタ
ルモノ。

第八表 右側滲出性肋膜炎
三〇某 早 三十六歲

月 日	發病ヨリノ經過日數	赤血球沈降速度		體溫	穿刺回数	滲出液量 (cc)	摘 要
		一時間	二時間				
21/V	約一ヶ月	3	7	37.0			胸部右側ハ第二肋骨以下滲出液滯溜シ心臓ハ著シク左側ニ壓迫セララル。
24/V	五週ノ終	40	63	36.5	1	1100	穿刺前ハ前回ト略ク同様ナリ、穿刺後漿液性氣胸ヲ起シ第四肋骨以下ニ滲出液滯溜ス。
31/V	七週	40	73	36.2	2	1100	滲出液ノ滯溜増加シ、穿刺後第五肋骨以下ニ滲出液アリ、第三肋骨以下ニ摩擦音ヲ聽ク。
7/VI	八週	42	77	36.5	3	950	穿刺後右側下部ノ摩擦音著クナリ、横膈膜ト肋膜ハ癒着ス。
14/V	九週	21	31	36.7	4	200	レントゲン透視上穿刺後モ下部ニハ稍ク一様ニ陰影アリ、横膈膜ノ運動ナシ。
21/V	十週	50	75	36.8			摩擦音依然タリ。
28/V	十一週	66	82	36.6			同上 右側肺尖ニ僅ニ水泡音現ハル。



第八表附圖

原著 吉本 肋膜炎經過中ニ於ケル赤血球沈降速度ノ變化

第八表ニ於テハ初メ多量ノ滲出液瀦溜セルニ拘ラズ沈降速度ハ殆ド尋常ニシテヤガテ著ク促進シ數回ノ穿刺後滲出液ノ瀦溜減少シ輕快セル四月十四日頃沈降速度ハ遲延シタルモ次デ肺臟ニ結核性ノ徵候現ル、ト共ニ最早滲出液ノ存在セザルモ更ニ沈降速度ノ著ク促進セルヲ見ル。

第九表

金○某 右側滲出性肋膜炎 十七歲

月 日	發病ヨリ經過日數	赤血球沈降速度			體溫	穿刺回数	滲出液量 (cc)	摘 要
		一時間	二時間	三時間				
12/III	約五ヶ月	71	103	109	37.2		胸部右側ハ全部濁音ヲ呈シ呼吸音甚々減弱シ上部ニ摩擦音アリ。	
17/II		82	105	115	37.1	1	1000	穿刺前ハ同上、穿刺後モ胸部右側ハ上部ヨリ全部濁音ヲ呈スルモ上部ヨリ第四肋骨迄呼吸音現レ、摩擦音アリ。
24/II	約五ヶ月半	77	86	100	36.0			
29/II		78	93	108	37.8	2	1200	胸部右側ハ全部濁音ヲ呈シ、上部ニ摩擦音アルモ呼吸音殆ドナシ。
14/IV	約六ヶ月	73	86	96	37.0			
21/II		86	106	112	36.7			右側胸部ハ上部ヨリ全部濁音ナルモ呼吸音現レ、レントゲン透視上一様ニ陰影アリ下部ニ至ルニ從ヒ陰影薄シ。
28/II	約六ヶ月半	83	105	112	36.3			同 上
5/V		85	105	110	36.3			同上ナルモ聽診上右側胸部ノ上部ニ僅ニ水泡音現ル。

第九表ニ於テハ二回穿刺後最早瀦溜セズ滲出液ハ穿刺ニ依リ證明シ得ザルモ肋膜ノ著キ肥厚、癒着ヲ胎シ更ニ肺臟ニ結核性ノ徵候現レタルニ沈降速度ノ次第二促進セルヲ知ル。

第二、臨床上合併症ヲ有スルモノ。

甲、結核性腹膜炎ニ肋膜炎ヲ併發セルモノ。

結核性腹膜炎モ餘リ自覺症無ク殊ニ疼痛、膨滿等輕度ナルトキハ其ノ發病時日滲出性肋膜炎ニ比シ明ナラザルモ少クモ結核性腹膜炎ヲ有シ滲出性肋膜炎ヲ併發セルモノニ就キ觀察セリ。

第十表 兩側滲出性肋膜炎兼結核性腹膜炎

平〇某 二十歲

月 日	發病ヨリ過日數	赤血球沈降速度		體溫	穿刺回数	滲出液量 (cc)	摘	要
		一時間	二時間					
8/XII	約三週	56	91	36.9				體格、榮養中等度、胸部右側ハ第三肋骨以下ニ滲出液アリ、體擦音ヲ聽ク、左側ハ第四肋骨以下ニ滲出液アリ。
17/XII	約四週	68	104	37.2	右側 左側 1 1	(右側) 1200 (左)		右側ハ穿刺後體擦音著ソクナリ、レントゲン透視上滲出液ノ像ナキモ第三肋骨以下ニ汚キ陰影アリ、右側肋膜ト膈膈膜ト癒着ス。
24/XII	五週	71	98	36.6				兩側ヨリ穿刺ス、穿刺後ハ右側ハ體擦音著ソクナリ、左側モ穿刺後體擦音著ソクナル、レントゲン透視上兩側下部ニ、汚キ陰影アリ、兩側肋膜ト膈膈膜ト癒着ス。
14/I	約六週	60	95	36.3	1.2	600(右) 500(左)		
21/I	七週	53	90		2	100(左)		
28/I	八週	50	85	37.0	3.3	30(右) 100(左)		右側ハ第三肋骨以下濁音ナルモ穿刺後レントゲン透視上滲出液ノ像ナシ、左側ハ前腋窩線ニ於テ第六肋骨以下濁音ナリ。
4/II	九週	40	77	36.1	4	30(右) —(左)		最早滲出液ハ無キモ右側ハ第三肋骨以下濁音ヲ呈ソク著シキ肋膜ノ肥厚癒着ヲ胎シ癒ニ體擦音アリ、左側ハ前腋窩線ニ於テ第六肋骨以下濁音ヲ呈ソク肋膜ノ癒着ヲ胎ス。
8/II				36.4				

(例記) 表中發病ヨリノ經過日數ハ滲出性肋膜炎ノ發病日數ナリ。

第十表ノ症例ハ同年十月中旬頃ヨリ結核性腹膜炎ト診斷セラル、症狀ヲ訴ヘ入院時(十二月五日)ハ腹部ノ大サ尋常ナルモ抵抗、緊張、壓痛ヲ訴ヘ索狀浸潤ヲ觸レタリ、入院後肋膜炎ノ滲出液ハ次第ニ減少シ遂ニ穿刺シ得ザルニ至リ沈降速度モ次第ニ遲延セルモ未ダ健康値ニ比シ速度速ナリ。

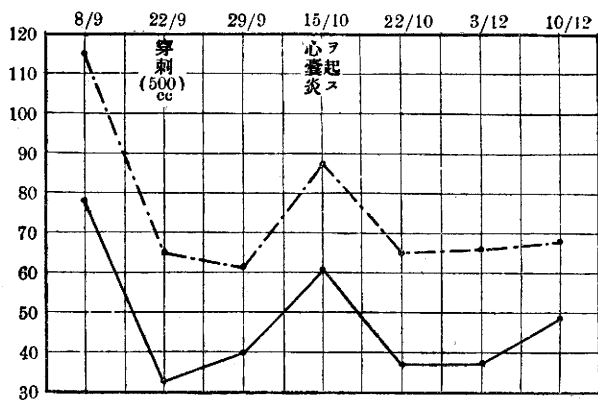
第十一表 右側滲出性肋膜炎兼結核性腹膜炎

石○某 十九歲

月 日	發病ヨリノ經過日數	赤血球沈降速度		體溫	穿刺回數	滲出液量 (cc)	摘 要
		一時間	二時間				
8/IX	9	78	115	38.0			胸部右側ハ第五肋骨以下濁音ヲ呈シ滲出液、滯溜セリ、摩擦音アリ。
22/ⅴ	23	33	65	36.5	1	500	レントゲン透視上右側ハ殆ンド全部滲出液ノ陰影ヲ呈シ穿刺後第三肋骨以下ニ滲出液ハ減少セルモ摩擦音著シ。
29/ⅴ	30	40	61	37.2			右側第五肋骨以下濁音ナルモ別ニ滲出液ナク摩擦音アリ。
15/X	46	61	87	36.3			右側胸部ハ打診上輕濁音ナルモ別ニ滲出液ナク摩擦音ナキモ心囊炎ヲ起ス。
22/ⅴ	53	36	65	36.4			同 上
3/XII	65	36	66	36.4			同上心囊炎ハ治癒ス。
10/XII	72	49	68	36.5			同 上

原 著 吉本 肋膜炎經過中ニ於ケル赤血球沈降速度ノ變化

第十一表附圖



第十一表ノ症例ニ於テハ同年七月十日頃ヨリ結核性腹膜炎ニ罹リ左側腹部ニ疼痛、膨滿アリ、八月二十九日頃ヨリ右側肋膜炎ニ罹ル、沈降速度ハ最初高度ノ促進アリ滲出液ヲ一回穿刺後再ビ滯溜セズ次第ニ輕快スルト共ニ沈降速度モ次第ニ遲延セルモ經過中心囊炎(摩擦音ヲ聞クモ滲出液ノ滯溜殆ド無シ)ヲ起セル際稍々促進セリ。

第十二表 兼結核性腹膜炎 上○某甲 二十歳 左側滲出性肋膜炎

月 日	發病 リ過 日數	赤血球沈降速度		體溫	穿 刺 回 數	滲 穿 出 刺 量 (cc)	摘	要
		一時間	二時間					
30/XI	二週	46	78	37.0				胸部左側ハ第三肋骨以下ニ滲出液アリ。腹部ハ一般ニ緊張抵抗、壓痛アルモ別ニ滲出液懸溜ノ徵候ナシ。
25/〃		51	77	37.0			同	上
27/〃	三週	31	51	35.8	1	1000		穿刺後第五肋間以下ニ僅カニ濃キ陰影アリ 摩擦音ヲ聽ク。
2/XII	約四週	43	79	36.9	2	60		同上 摩擦音依然ナリ、左側肺尖部ニ僅ニ水泡音ヲ聽ク。
11/〃	五週	39	67	36.0	3	150		穿刺後モ左側下部ハ殊ニ陰影ヲ呈ス。
18/〃	六週	56	82	36.0				左側肺尖部ニ僅ニ水泡音アリ、肋膜ノ著シキ癒着ヲ胎ス。

第十二表ノ症例ハ腹部ニ膨滿鼓腸ナキモ緊張、抵抗、壓痛ヲ有シ、然モ其ノ發病時日ハ明ナラズ。入院後肋腔滲出液ハ數回穿刺後遂ニ瀦溜セザルニ至リ腹膜炎又輕快セルモ肺臟ニ結核性徵候現レ、沈降速度ハ遲延セズ却テ促進セリ。

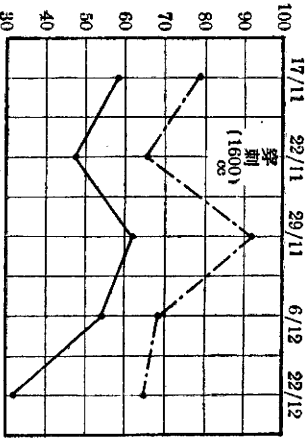
乙、微毒患者ノ滲出性肋膜炎ニ罹リシモノ。

微毒患者ノ赤血球沈降速度ニ關シ(28) Joachim ハワッセルマン 反應ト沈降速度ヲ同時ニ檢シタルニ進行性麻痺症ニ於テワッセルマン 反應陽性ト沈降速度ノ促進ト一致セルノミニシテ其他ノ多數ノワッセルマン 反應強陽性ノ者ニ却テ沈降速度遲キヲ認メタリ、然ルニ(30) Popper und Wagner 等ハ微毒患者ニ沈降速度速ナルヲ認メ殊ニ第二期微毒ニ於テ然リト云フ、更ニ(31) Schinbert ハ「メタ」微毒ヲ除キ種々ノ時期ニ就キワッセルマン 反應ト沈降速度ヲ測定セルニ其ノ約七五%ニ促進スルヲ認メ殊ニ微毒症狀著明ナルモノニ沈降速度大ナリト云フ、然レドモワッセルマン 反應ト沈降速度ハ必ズシモ一致セズ、一部其ノ強陽性ノ者ニ何等促進無ク他方第二期微毒ノ一例ニ於テ治療後ワッセルマン 反應ハ

殆ド陰性トナルルモ尙速度大ナルヲ認メ兩者ノ陽性、促進ノ機轉ハ全ク別個ノモノナラント述ベタルモ少クモ臨床上
 微毒ノ鑑別診斷ニ參考トセラルベキモノト論ゼリ、故ニ滲出性肋膜炎患者ノ沈降速度ヲ觀察スルニ當リ常ニ微毒ノ有
 無ニ注意シ血液ワッセルマン反應ヲ行ヒ微毒患者ニシテ滲出性肋膜炎ニ罹リシモノニモ經過ヲ逐ヒ沈降速度ヲ觀察
 セリ。

第十三表 左側滲出性肋膜炎兼 潜伏性第二期微毒 増○某ハ二十七歳

日	發病ヨリ 過日數	赤血球沈降速度 一時間	二時間	體溫	穿刺回數	滲出液量 (cc)	摘	要
17/XI	32	58	79	36.5				體格中等度、胸部左側ハ第三肋骨ヨリ以下ニ 總出液アリ。
22/〃	35	47	66	36.6	1	1600		穿刺後左側第三肋骨以下ハ一様ニ稍陰影ヲ呈シ左側肋膜ハ横 膈膜ハ僅ニ癒者ス。
29/〃	42	62	93	36.4				胸部左側下部ハ輕微音ヲ呈シ僅ニ摩擦音アリ、 レントゲン透視上汚キ陰影アリ。
6/XII	49	54	68	36.3			同	上
22/〃	65	32	65	35.9				摩擦音無シ。



第十三表附圖

第十三表ノ症例ニアリテハ初メ多量ノ滲出液アリ、一回穿刺後再ビ滯
 溜セズ、肋膜炎ハ治癒シ沈降速度モ次第二遲延シタルニ滲出液穿刺後一
 ケ月ヲ經過スルモ尙健康値ニ比シ甚シキ促進アリ、第十六表ノ症例ニ於
 テハ觀察ノ經過餘リ永カラザルモ初メヨリ著キ促進アリ、之等ハ何レモ
 血液ワッセルマン反應強陽性ニシテ潜伏性第二期微毒ニシテ之ガタメ更
 ニ或ハ多少赤血球沈降速度促進シ肋膜炎輕快後一定時日ヲ經ルモ健康値
 ニ比シ尙相當ノ距離アルガタメナランカ。

第十四表 左側滲出性肋膜炎兼第二期潜伏梅毒

梶 某 合 二十九歳

月 日	發病ヨリノ經過日數	赤血球沈降速度		體温	穿刺回數	滲出液量 (cc)	摘	要
		一時間	二時間					
26/X	13	118	123	37.0	1	20 (試驗穿刺)	頸部ハ左側第三肋骨以下濡音ヲ呈シ摩擦音アリレントゲン透視上滲出液ノ陰影ヲ見ル。	
27/X	18	118	122	36.4	2	950	穿刺前ハ前回ト略同シ。穿刺後摩擦音著明トナリ、滲出液瀰留セル部ハ一様ニ薄キ陰影アリ	
5/XI	27	116	122	37.7		22	左側ハ前回ノ穿刺後ト略同シキモ、右側ハ肺門部及氣管支周圍ニ汚キ陰影アリ、肋膜ノ癒着ヲ胎ス。	

第三章 實驗成績總括

上述セル如ク滲出性肋膜炎患者ニ就キ臨床上全ク合併症ヲ有セザルモノト合併症ヲ有スル者トニ分チ前者即チ最初ヨリ臨床上全ク合併症無キ者ニ就キ一回穿刺後再ビ滲出液ノ瀰留セザリシモノト、再三瀰留セルモ遂ニ瀰留セズ輕快セルモノ及ビ其ノ經過中肺臟ニ結核性ノ徵候ヲ認メタルモノトニ分類セルニ滲出液ガ一回ノ穿刺後再ビ瀰留セズ全ク吸收セラレ治癒セルモノ、中殆ド肋膜ノ肥厚或ハ著キ癒着ヲ胎サザリシモノハ赤血球沈降速度ノ次第ニ減少シ穿刺後既ニ二週乃至一ヶ月後ニ至リテハ殆ド健康値ニ迄減退セルヲ觀ル(第一表、第二表)、而シテ相當肋膜ノ肥厚或ハ癒着ヲ胎セルモノハ穿刺後沈降速度ノ次第ニ減退セルモ前者ノ如ク短時日後ニ在リテハ未ダ健康値ニ復歸セズ(第三表、第四表)、更ニ滲出液ノ一回穿刺後再三瀰留シ、數回穿刺セルモノ、中、胸腔内滲出液量ノ多寡ト沈降速度ノ増減トノ間ニハ必ズシモ平行關係ナク稀ニ滲出液瀰留甚ダ多量ニナルニ際シ沈降速度ノ尙殆ド尋常值ナルヲ見ル事アルモ一般ニ胸腔内滲出液ノ瀰留量ノ次第ニ減少シ輕快ノ傾向ヲ示ス場合ハ沈降速度モ亦次第ニ遲延スル傾向アリ(第五表、

第六表、第七表)、更ニ滲出液ノ再三滯溜セルモ遂ニ滯溜セザルニ至リテモ尙肋膜ノ著キ肥厚、癒着ト共ニ臨床上肺臟ニ結核性徵候ノ現レタルモノハ沈降速度ノ減少セザルカ(第九表)、或ハ一時肋膜炎ノ輕快ト共ニ沈降速度モ亦一時遲延セルモ臨床上肺臟ニ結核性ノ徵候現ハル、ヤ再ビ促進ス(第八表)、次ギニ合併症ヲ有スルモノ、中結核性腹膜炎ニ肋膜炎ヲ併發セルモノ、中腹膜炎ハ少クモ増悪セズ肋膜炎ハ次第ニ治癒ノ傾向アル場合ハ沈降速度モ亦次第ニ減退スルモ(第十表)滲出液ノ滯溜セズ肋膜炎ハ治癒セルモ肺臟ニ結核性徵候ノ現ハル、ニ至レルモノニ在リテハ沈降速度ハ減少セザルカ或ハ却テ促進スルヲ觀ル(第十二表)、次ニ微毒患者ニ於テモ肋膜炎ノ輕快ト共ニ沈降速度モ次第ニ減退スル傾向アリ、之ヲ要スルニ本病ノ治癒輕快又ハ増悪ト赤血球沈降速度トノ間ニハ略々一定ノ平行的關係アリ、然レドモ先人ノ所謂肋膜炎患者ノ赤血球沈降速度ヲ云々スルニ當リ單ニ一—二回ノ測定ニヨリ滲出性肋膜炎ノ沈降速度ヲ云々スルハ當ヲ失スルモノニシテ甚ダ多量ノ滲出液ヲ滯溜スルモ沈降速度殆ド尋常ナル場合屢々ナルヲ見ル(第五表第六表、第八表)、而シテ滲出液ノ有無即チ濕性、乾性ニヨリ沈降速度ヲ云々スルニ當リ良ク肺臟ニ結核性病竈ノ有無ヲ檢スベキモノニシテ、タトヒ乾性(臨床上初メヨリ滲出液無ク摩擦音ノミアルモノ)ナルモ肺臟ニ進行性結核竈アラシカ沈降速度大ナルハ勿論ナリトス、要スルニ滲出性肋膜炎ノ經過中逐次赤血球沈降速度ヲ測定シテ甫メテ本病ノ赤血球沈降速度ヲ云々シ得ルモノナルヲ確信ス、斯クシテ本病ノ輕快治癒又ハ増悪ト赤血球沈降速度ノ遲延又ハ促進トニ略々平行的關係ヲ認ムルモノニシテ之ガ本病ノ治療及ビ豫後ノ判定ニ應用セラル、ニ足ルモノナラント思惟ス。

文 獻

- 1) Neergard, Schweizerische medizinische Wochenschrift. Jg. 53. Nr. 49, S. 1122, 1923.
- 2) Windrath u. Garnatz, Zeitschrift für Tuberkulose. Bd. 40. H. 3, S. 203, 1924.
- 3) Weicksel, Deutsche med. Wochenschrift. Jg. 50. Nr. 47, S. 1603, 1924.
- 4) 長島豊治: 結核、第四卷、第十號、千五百頁(大正十五年)。
- 5) 大谷誠: 日新醫學、第十五卷、第七五七頁。
- 6) 出井澤三: 胸膜炎患者ノ血球沈降速度、陸軍々醫團雜誌、第百五七號、第百一頁、(大正十五年七月)。
- 7) Fahræus, Kongresszentralblatt für die gesamte innere Medizin.

- Bd. 22. S. 294, 1922. 8) **A. Westergren**, Ergebnisse der inneren Medizin u. Kinderheilkunde. Bd. 26. S. 648, 1924. 9) ヲ ヲ 14) マ
 テ 8) ニ ヨ ル 15) **古市虎熊** : 臺灣醫學會雜誌、第二三五號、第三三〇頁。 16) 5) ニ ヨ ル 17) **Bardach**, Archiv für Kinder-
 heilkunde. Bd. 70. H. 2, S. 114, 1922. 18) **György**, 8) ニ ヨ ル 19) **Asal-Falkenheim**, Münchener med. Wochenschrift. Nr. 10, S.
 291, 1923. 20) **Dehoff**, 8) ニ ヨ ル 21) **Linzenmeier**, 8) ニ ヨ ル 22) **Rumpf**, Zentralblatt für Gynäkologie. Nr. 30, S. 1242,
 1922. 23) **G. Haselhorst**, Deutsche med. Wochenschrift. Jg. 48. Nr. 33, S. 1100, 1922. 24) **H. Poindecker u. K. Siess**, Wiener
 Klinische Wochenschrift. Jg. 35. Nr. 50, S. 971, 1922. 25) **W. Löhr**, Zentralblatt für Chirurgie. Jg. 48. Nr. 25, S. 1267, 1921.
 26) **Runge**, Münchener med. Wochenschrift. Jg. 67. Nr. 33, S. 953, 1920. 27) **Pribram u. Otto Klein**, Kongresszentralblatt für die
 Gesamte innere Medizin. Bd. 29. S. 535, 1923. 28) **Schürer u. Eimer**, Berliner klin. Wochenschrift. Nr. 42. S. 1251, 1921. 29)
Joachim, Folia Hæmatologica (Archiv). Bd. 29. S. 34, 1923. 30) **Popper u. Wagner**, zit. nach 29) 31) **M. Schubert**,
 Dermatologische Zeitschrift. Bd. 41. S. 132, 1924.